

3 章

その他の事業

北海道発見・雇用促進モデル事業

1 第一回就農促進研修

(1) 事業概要

目的

東日本大震災及び原発事故が発生した後、現在なかなか雇用に結びつかない状況が見受けられる。そこで、北海道の主要な産業である農業に就くことを考えておられる避難者の方々に有益な判断材料となるよう本研修を企画した。

札幌近郊にあるハウス栽培を中心として経営している余湖農園を訪問して見学や収穫作業を体験することによって就農に対するより深い理解を得、今後の職業選択の際、判断の材料とすることを目的に実施した。

対象者

東日本大震災による避難者の方で、就農を考えている方を対象とした。

参加者 11名

参集方法

北海道 NPO 被災者支援ネット（札幌市）が発行する「生活支援ほっとニュース」に記事を掲載して募集した。

実施日及び内容

ア 実施日 平成 24 年 7 月 7 日

イ 実施内容

講義 北海道農業全般・ハウス栽培について

講義 余湖農園の取り組み

農場見学・野菜収穫

実施機関 北海道避難者アシスト協議会

（NPO 法人北海道ふるさと回帰支援センター）

研修先施設の概要

余湖農園（恵庭市稲栄 323 番地）

余湖農園は、温暖な気候・風土で、農地に適した平地が多い恵庭市にあり、消費者の「安心・安全な野菜を栽培してほしい」との声に応えるため JGAP 認証を取得し、食の安全や環境保全に取り組みながら野菜の栽培や直売所の運営、食品加工体験等の事業を行っている。

(2) 実施結果

講義 北海道農業全般・ハウス栽培について

(講師 NPO 法人ふるさと回帰支援センター 佐藤 隆理事長)

佐藤講師より、まず北海道の農業の現状について、「北海道は大規模の専業農家が目立ち、道外の兼業農家とは異なるように見えるが、小規模農家も多く、経営難と高齢化が進んでいる」と説明された。

また、「初めての方は半年程度の農業研修を受けて、本当に行えそうか体験してからの方が確実である。可能であればご夫婦二人で研修を受けられる方が良い」とアドバイスした。

さらに新規に就農しようと思っている方に有益な補助金として青年就農給付金について詳しく説明された。

参加者から、農業に関係する職業訓練について質問を受け、詳しく答えていた。

講義 余湖農園の取り組み

(講師 有限会社余湖農園 余湖 智代表取締役)

余湖講師より、余湖農園全体の概要、栽培している農作物の品種、農作物栽培や出荷に関わる設備、顧客、経営規模に関する説明をされた。

余湖農園はトマトに力を入れており、収穫したトマトを原料とした加工商品(トマトジュース、ラーメン、ソフトクリーム等)を販売している。また、トマトソースづくり体験などの加工体験も行っている。



写真 余湖農園のハウス施設



写真 余湖農園の商品の例
「とまとジュース」

農場見学・野菜収穫

(講師 有限会社余湖農園 余湖 智代表取締役)

余湖講師より、実際のハウスや畑を案内していただき、野菜栽培の方法等について説明を受けた。説明を受けながら、収穫や調製作業も体験した。

まず、水耕栽培のレタスについて説明を受け、収穫作業を行った。



写真 野菜栽培の説明の様子



写真 レタスの収穫作業体験

次に、様々な農作物を見ながら説明を受け、ニラとネギの収穫作業を行った。余湖講師より、「ニラは鎌で葉の部分刈り取り、ネギは根から抜く」と収穫方法を教わった。ニラの調製作業も教わり、体験した。

また、カブや水菜の収穫について指導があり、参加者は積極的に体験していた。



写真 ネギの収穫作業体験



写真 ニラの調製作業体験



写真 カブの収穫作業体験



写真 水菜の収穫作業体験

余湖講師は、栽培の苦勞する点についても触れ、農薬をあまり使わない栽培をしているため、雑草が多く生えており、選別しながら収穫するので労力がかかることや雑草防除のために生分解性マルチを使うのでコストがかかることなどを説明された。また、短期職員も雇用しているが人手は不足していると話された。

(3) 参加者へのアンケート結果

回収数 11/配布数 11

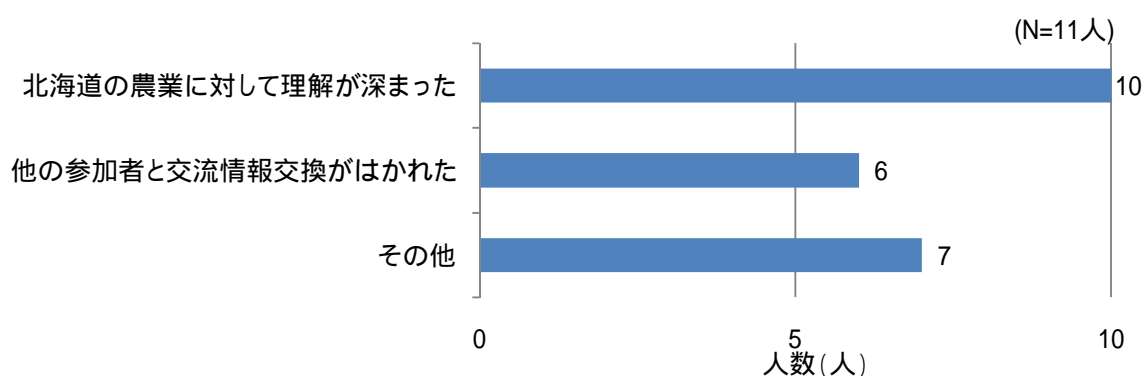
設問1 就農促進研修の満足度

(N=11人)

項目	人数(人)
満足	11
やや満足	0
やや不満足	0
不満足	0

就農促進研修の満足度については、全員が満足だと回答した。

設問2 参加してよかった点(複数回答)



その他(記述回答)
● 畑での体験、直接野菜を取る等の手に触れた事がよかった
● コープの余湖農園コーナーでいつも買っているので生産現場を見られてよかった

設問3 次回の研修への参加希望

(N=11人)

項目	人数(人)
ぜひ参加したい	11
どちらかと言えば参加したい	0
あまり参加したくない	0
参加したくない	0

次回の研修への参加希望については、全員が「ぜひ参加したい」と回答した。

設問4 研修内容の希望（複数回答）

(N=11人)

業種	職種	回答数
農業	生産工程・労務	3
農業	農林漁業	3
農業	専門技術	2
医療	事務	1
漁業		1
建設業	専門技術	1
建設業	サービス	1
サービス業	サービス	1
サービス業	販売	1
製造業	サービス	1
製造業	事務	1
通信	通信	1
農業		1
農業	販売	1
福祉	サービス	1
林業		1
林業	事務	1
林業	農林漁業	1
林業	生産工程・労務	1

設問5 改善してほしい点（記述回答）

- ・ 農作業や栽培に関する座学もあればうれしかった
- ・ 幅広い事前告知

改善してほしい点については、「農作業や栽培に関する座学もあればうれしかった」などの意見があった。

2 第二回就農促進講習

(1) 事業概要

目的

東日本大震災による道内への避難者は主に札幌圏に集中しており、富良野や十勝地域で講習を実施することで、札幌圏以外の地域で実際に行われている農業を目にすることができ、今後定住を含めて考える際の有益な判断材料となるよう本講習を企画した。

対象者

東日本大震災による避難者の方で、就農を考えている方を対象とした。

参加者 13名

参集方法

当団体ホームページ及び北海道 NPO 被災者支援ネット（札幌市）が発行する「生活支援ほっとニュース」に記事を掲載して募集した。

実施日及び内容

ア 実施日 平成 24 年 8 月 11 日～平成 24 年 8 月 12 日

イ 実施内容

事前講習	講習先の概要（富良野メロン栽培及び豊頃町の農業）
就農講習	寺坂農園の概要及びメロン栽培
就農講習	十勝地域の農業と就農支援

実施機関 北海道避難者アシスト協議会

（NPO 法人北海道ふるさと回帰支援センター）

講習先の概要

ア 寺坂農園（空知郡中富良野町東 5 線北 4 号）

主にメロン栽培を行い、通信販売と直売所で売り上げを伸ばしている。農業研修生等の受入れも積極的に行っている。

イ 豊頃町アグリサポートセンター（中川郡豊頃町中央若葉町 24-2）

豊頃町が所有する公共施設で、その運営を JA 豊頃と協力して「アグリサポートセンター」とよこが行っている。施設は農業関係者が入居する宿泊棟と農業研修生らが短期宿泊並びに料理実習等の各種研修ができる研修棟からなる。農業研修や町の交流事業などに利用されている。

ウ NPO 法人食の絆を育む会

消費者を農山漁村で受け入れ、実際に農林漁業を体験してもらい今まで自分事ではなかった一次産業を身近に感じることで、「食」や「農林漁業」に対する理解を深めてもらうことを目的とする NPO 法人。北海道・十勝管内の 9 つの団体(12 町村の農林漁業者がメンバー) で構成されている。

それぞれの団体に所属する農林漁業者と連携しながら学生等を対象とした農村ホームステイ事業を行っている。

(2) 実施結果

事前講習 講習先の概要 (富良野メロン栽培及び豊頃町の農業)

(講師 株式会社北前船 中村 高士代表取締役社長)

九州などに北海道の農産物を送るバイヤーの仕事をしている中村講師より、講習先である富良野地域のメロン栽培や豊頃町の歴史と農業の概要について説明を受けた。



写真 事前講習の様子

就農講習 農園の概要及びメロン栽培

(講師 株式会社寺坂農園 寺坂 祐一代表)

ア 実地講義

寺坂講師より、農園の概要について説明を受けた。農園では、メロン栽培に力を入れており、贈答品向けの高価格・高品質のメロンを栽培している。また、とうもろこしの栽培もしており、年々作付け面積を増やしている。

ビニールハウスの中に参加者を案内し、栽培されているメロンを目の前に、赤肉・青肉メロンの特徴や収穫までの温度管理の重要性等について説明された。

収穫のタイミングに失敗したメロンを目の前に、「よくあること」として紹介し、参加者は栽培の難しさを感じているようであった。



写真 農園の説明をする様子



写真 ハウス内の見学

イ 農園研修生による説明

寺坂農園の研修生として働いている櫻井氏より、就農するまでの経緯や今後の目標等について説明があった。

櫻井氏は、宮城県でメロン等を栽培する農家であったが、東日本大震災により被災して畑が壊滅的な状態になり、再起を図るため道内に避難した。現在は、寺坂農園で研修し、北海道でのメロン栽培方法などについて学んでいる。メロン栽培技術を既に持っていることから、一部のハウスを担当してメロン栽培を行っている。

櫻井氏より、宮城県で自分がしてきたメロン栽培と寺坂農園でのメロン栽培の違いや富良野の気候の特徴、今後の農業経営の目標等について説明を受けた。

参加者からは、「今後どのくらいで独立できそうか」、「どうして寺坂農園を選んだのか」などの質問があった。



写真 櫻井氏（左端）による説明の様子



写真 櫻井氏の説明に聞き入る参加者

ウ 座学での講義

農園の研修室内に場所を移し、寺坂講師より、インターネットを活用した通信販売の説明、フェイスブックの活用等の説明を受けた。その後、寺坂農園が制作したDVDを見ながら説明を受けた。

寺坂農園では、販路の拡大にインターネットを活用している。Web担当のスタッフもあり、フェイスブックも開設している。13年前からメロン栽培を始めたが、経営が軌道にのったのはここ3年のことであるとのことであった。

寺坂講師は、13年前までは、稲や豆を栽培していたが利益が少ないことに不満があり、メロン栽培に切り替え、徹底して高品質、良食味のメロンを栽培することにこだわってきた。地域農家とも良好な関係を続けていくために、積極的に地域の行事に参加したりしてきた。その結果として、周囲に認められるようになった。経営が軌道にのるまでに大変な苦労があったことや、地域で生きていくために地域の方々と良好な関係づくりをする大切さについて説明された。

参加者からは、「地域に受け入れられるためにどんな努力をしたのか」、「どんなことが不満の原因になるのか」、「経営の資金は何を活用しているのか」などたくさん質問があがった。



写真 寺坂講師の説明に聞き入る参加者



写真 紹介 DVD を見ての講義

就農講習 十勝地域の農業と就農支援について
(講師 NPO 法人食の絆を育む会 近江 正隆事務局長)

ア 十勝地域の農業や就農について

近江講師より、まず北海道の農業の特徴や十勝地域の農業について説明を受けた。また、講習の場所として選んだ豊頃町アグリサポートセンターが位置する十勝地域の農業についても触れた。十勝地域は水田がなく、畑作や畜産・酪農が主であること、十勝地域で生産されているのは、小麦、大豆、小豆、馬鈴薯、てんさいなどが多く、食品の主原料となるものが中心であることなどの説明があった。

次に、自身の経歴について説明され、「北海道出身で、Uターンで町に帰ってきて、現在は地域の農産物を関東地方の消費者につなぐ仕事をしている。故郷に戻ってから収入はかなり減ったが、得るものは大きく、子どもを育てる環境として良いと感じている」などと説明された。

また、参加者に向けて、「就農を考えている方、興味がある方は、農業体験や研修を活用してどんな仕事か、自分に合うかを確認してほしい。配布資料の『農業を始めるサイト』等のインターネット情報等を利用してほしい」と説明した。

イ 新規就農者の体験談

近江講師より、今年から就農した山下氏の紹介があり、山下氏は実際に就農されての感想を述べられた。就農1年目の山下氏より、就農してみたの感想、仕事内容、今後の目標、就農して良かった点などについて説明を受けた。

参加者より、「大型免許など持っているとな就職(法人雇用等)に有利か」、「山下氏の一日の作業スケジュールを教えて欲しい。また、朝が早くてつらくないか」などの質問があった。



写真 会場で使用した
豊頃町アグリサポートセンター



写真 近江講師による説明の様子



写真 山下氏による体験談の説明

(3) 参加者へのアンケート結果

回収数 12/配布数 12

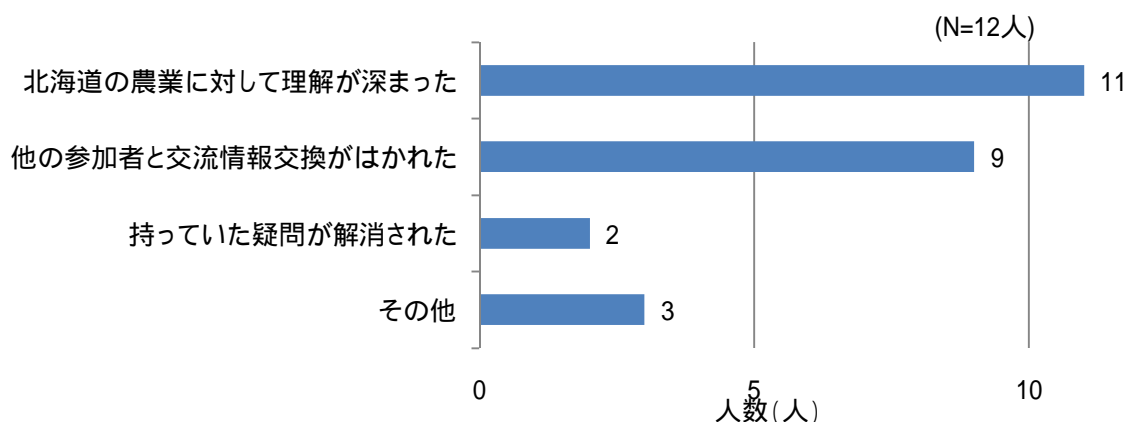
設問1 就農促進講習の満足度

(N=12人)

項目	人数(人)
満足	10
やや満足	1
やや不満足	1
不満足	0

講習の満足度に関する設問については10人が「満足」と答えた。

設問2 参加してよかった点(複数回答)



その他(記述回答)

- 農業に従事するにあたり、他の地から就労してきた話等を聞き、自分の目標がより明確になった
- 北海道をよく知る・知りたいと強く思うきっかけになった

設問3 次回の講習への参加希望

(N=12人)

項目	人数(人)
ぜひ参加したい	7
どちらかと言えば参加したい	4
あまり参加したくない	1
参加したくない	0

次回の研修への参加希望については7人が「ぜひ参加したい」と答えた。

設問4 講習内容の希望（複数回答）

(N=12人)

業種	職種	回答数
農業	農林漁業	2
農業	専門技術	2
漁業	輸送	1
建設業	専門技術	1
建設業	保安	1
製造業	事務	2
製造業	生産工程・労務	2
製造業	専門技術	1
製造業	保安	1
サービス業	サービス	2
サービス業	事務	2
サービス業	販売	1
サービス業	生産工程・労務	1
サービス業	その他(ものづくり)	1
福祉		2
福祉	保安	1
福祉	専門技術	1
運輸	輸送	1
運輸	販売	1
運輸	サービス	1

設問5 改善してほしい点（記述回答）

- ・ 変更があってもいいので、もう少し詳しい日程表があってもいい
- ・ 近い場所かつ、日帰りの日程で実施するならまた参加したい
- ・ 生計を維持するものが見るような具体的な資料があればよい
- ・ 簡単な軽作業があれば実体験としてよい

設問6 講習で印象に残ったこと

- ・ これから、自分達被災者のスキルなどを上げていくためにも、こういった企画を続けていってくれば良いなと思った
- ・ 農業は大変な仕事というイメージがあったが、どういうところが大変でやりがいがあるのかということも新たにわかった

講習で印象に残ったことについては「農業の大変さ、やりがいがあるのかということが新たにわかった」などの意見があった。

3 第三回就農・就労講座

(1) 事業概要

目的

東日本大震災及び原発事故が発生した後、現在なかなか就業できずにいる避難者が多い状況が見受けられる。そこで、北海道の主要な産業である農業及び関連産業に就くことを考えておられる避難者の方々に有益な判断材料となるよう本研修を企画した。

果樹園及び地元農業と結びつきのある飲食店で研修を行い、就農や就労に対するより深い理解を得ることを目的とする。

対象者

東日本大震災による避難者の方で、就農を考えている方を対象とした。

参加者 5名

参集方法

北海道 NPO 被災者支援ネット（札幌市）が発行する「生活支援ほっとニュース」に記事を掲載して募集した。

実施日及び内容

ア 実施日 平成 24 年 10 月 7 日

イ 実施内容

- 講義 北海道の農業及び農業者への行政支援
- 講義 コミュニティレストラン～新しい仕事場作り
- 講義 新しい農業の形～エコビレッジ推進プロジェクトの取り組み
- 講義 余市ハル農園の取り組み

実施機関 北海道避難者アシスト協議会
(NPO 法人北海道ふるさと回帰支援センター)

講座先施設の概要

ア 余市テラス（余市郡余市町黒川町 10 丁目 3-27）

地域の人たちの交流を進めることを目的とするコミュニティ・レストラン。

コミュニティ・レストランとは特定非営利活動法人 NPO 研修・情報センターが推進する「食」を核にしたコミュニティ支援を目的とした NPO の起業モデル。

余市テラスは、地元の旬の食材を活用した料理を提供しており、まちづくり学習会、ライブコンサートなどを定期的に行っている。

イ 余市ハル農園（余市郡余市町登町 1863）

特定非営利活動法人北海道エコビレッジ推進プロジェクトが平成 24 年から管理する農園。コストをできるだけかけずに、持続可能な食糧自給や住まいの技術の実現などを目的として運営されている。ワイン用ぶどう、生食用ぶどう、オウトウなどの果樹、自給用の野菜を栽培し、エコビレッジの会員有志が管理に携わっている。ものづくりのワークショップや果樹作業体験の他、学生実習や企業研修のプログラムを行っている。

(2) 実施結果

講義 北海道の農業及び農業者への行政支援

(講師 NPO 法人北海道ふるさと回帰支援センター 佐藤 隆理事長)

佐藤講師は6年前に特定非営利活動法人北海道ふるさと回帰支援センターを設立し、ここ3年は主に就農希望者への研修事業を行っている。

佐藤講師より、まず北海道の農業の概要について説明を受けた。「北海道農業は地域によって大きく3つに分かれる。十勝地域を中心とする畑作、空知地域や上川地域の稲作、北海道東部・北部の酪農畜産である。国の政策もあり、経営規模を拡大し、広い面積で専業農家を経営するのが北海道の農業の主流である」などと概要を説明され、「後継者不足により、札幌近郊にも休耕地が多数あり、担い手の確保と農地の有効活用が課題となっている」と現状を説明された。

次に、新規就農をするにあたっての様々な問題に触れ、農地取得の問題や新規就農に対する行政の支援事業の要件と注意すべき点、新規就農するにあたり必要な資金等について説明された。

参加者から、「行政による融資の要件についてもう一度説明してほしい」など質問があった。



写真 佐藤講師による説明の様子



写真 講義に聞き入る参加者

講義 コミュニティ・レストラン～新しい仕事場作り

(講師 コミュニティ・レストランネットワーク北海道 伊藤 規久子代表)

伊藤氏は平成13年からコミュニティ・レストラン研究会を作って北海道でコミュニティ・レストランを広げていく活動をしており、5年前に自身で余市テラスを開業して、地域の人たちの交流を進めるため、レストランの運営の他、まちづくり学習会、ライブコンサートなどを定期的に行っている。

伊藤講師より、コミュニティ・レストランについての説明をされ、余市テラスの取り組みについて紹介された。

余市テラスでは、安心して安全な食事を提供することを目標にしており、地元の有機栽培農家から食材を仕入れるなど、顔の見える関係を大切にして食材を選んでいる。障がいをもつ養護学校の生徒が研修に来たり、高齢の単身者が訪れるなど様々な地域の人たちの憩いの場として活用されている。他に、苦勞している点にも触れ、公的な助成金を活用してうまく活動を進めていることを説明された。



写真 会場の余市テラス



写真 伊藤講師による講義の様子

講義 新しい農業の形～エコビレッジ推進プロジェクトの取組み
 (講師 NPO 法人北海道エコビレッジ推進プロジェクト 坂本 純科代表)
 坂本講師は、エコビレッジを推進する活動をしており、余市町にある余市ハル農園を平成24年の春から管理している。

まず、エコビレッジの概要について説明され、フランス、ドイツ、スコットランドの取組みについて紹介された。

エコビレッジ推進プロジェクトは共同で農場を経営するような構想であり、イギリスだと一つの村が全部参加しているところもある。坂本講師より、将来のエコビレッジ構想について、説明された。

次に、現在の余市ハル農園での活動について、目標としていること、会員がボランティアで手伝い運営していることなどについて説明された。

参加者は、興味をもって話に聞き入り、「会員は主にどこに住んでいるか」、「海外に行ってから、日本の環境に関する考え方はどう映ったか」などの質問をしていた。



写真 坂本講師による説明の様子



写真 坂本講師の話を聞く参加者

余市ハル農園の取組み
 (講師 特定非営利活動法人エコビレッジ推進プロジェクトハル農園担当 笠 小春氏)

余市ハル農園の実際の取組みについて、農園に住み、管理を行っている笠講師より説明を受けた。

農園を設立するに至った経緯について話され、ハル農園という名前の由来はアイヌ語で食糧という意味があり、「この農園で採れた食糧を皆で分かち合いたい」という願いを込めてハル農園と名付けたと説明された。また、余市町は北海道で初めてりんごが実った町で、余市町の果樹栽培の歴史は古いことを説明された。

次に、農園を見学しながら、栽培している作物について栽培管理の方法や品種の特徴、苦労している点などについて説明を受けた。

オウトウに関しては、ここ数年は収穫時期の降水量が多く、その影響で病気にかかりやすくなり、収穫量が激減したため、トマト栽培に切り替える農家が多いことについて話された。

他に生食用のぶどう、ワイン用のぶどう、なし、もも、自給用の多種類の野菜について説明を受けながら見学した。他に、農園でのエコロジーの取り組みとしてバイオトイレやソーラークッカーについて説明された。

参加者は、初めて見るワイン用ぶどうや多種類の野菜などに注目し、観察していた。

バイオトイレなどエコロジーの取り組みにも関心をもって聞いている様子であった。



写真 ハル農園の説明をする笠講師



写真 ぶどうについての説明の様子



写真 野菜栽培の説明の様子



写真 バイオトイレの説明の様子

(3) 参加者へのアンケート結果

回収数 5/配布数 5

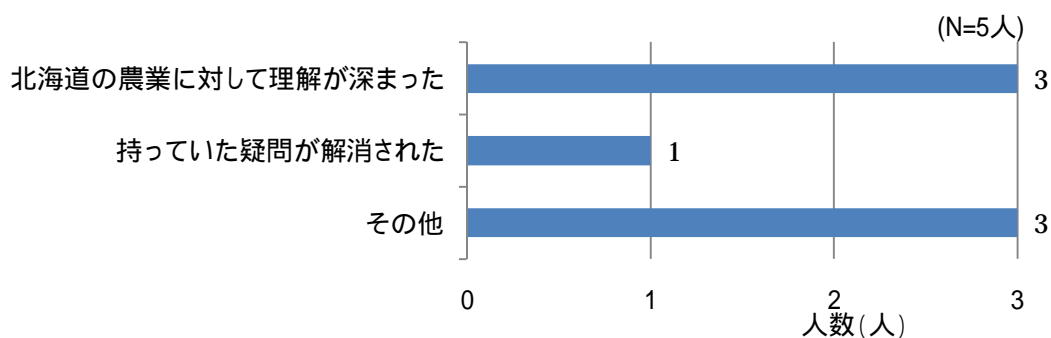
設問1 就農・就労講座の満足度

(N=5人)

項目	人数(人)
満足	3
やや満足	2
やや不満足	0
不満足	0

講座の満足度については、「満足」が3人、「やや満足」が2人であった。

設問2 参加してよかった点(複数回答)



その他(記述回答)
● エコビレッジの考え方は素晴らしいので実現モデルを見たいと思った
● コミレスの大切さも実感できました

設問3 次回の講座への参加希望

(N=5人)

項目	人数(人)
ぜひ参加したい	3
どちらかと言えば参加したい	2
あまり参加したくない	0
参加したくない	0

設問 4 講座の内容の希望（複数回答）

(N=5人)

業種	職種	回答数
農業	専門技術	2
農業	販売	1
農業	サービス	1
医療	事務	1
農業		1
漁業	販売	1
製造業	専門技術	1
製造業	事務	1
製造業	販売	1
製造業	サービス	1
製造業	生産工程・労務	1
サービス業	販売	1
サービス業	生産工程・労務	1

設問 5 改善してほしい点（記述回答）

- ・ 移動時間が長くなるので札幌市内での研修が実現できるとより良い

設問 6 以前に当団体の実施した就業研修参加の有無

(N=5)

はい	3
いいえ	2

設問 7 当団体の就業研修の感想（記述回答）

- ・ 今後どのように農業に関われるか考える機会になった
- ・ 当初持っていたイメージ以外の技術や知恵、問題点がとても勉強になった

当団体の就業研修の感想については「今後どのように農業に関われるか考える機会になった」という意見があった。

設問 8 当団体以外での就業研修参加の有無

(N=5)

はい	0
いいえ	5

4 雇用・就業に関する情報の紹介

(1) 実施概要

目的

避難者の中には、北海道の雇用・就業環境をよく知らないことから職業選択の幅が狭くなっている者もいると思われる。

ブログを通して職業選択に関する有益な情報を発信することで避難者の雇用・就業を促すことを目的として実施した。

対象者

東日本大震災による避難者の方で、就職・就業を考えている方を対象とした。

ブログ概要

北海道避難者アシスト協議会(アドレス <http://blog.canpan.info/hhak/>)

ブログ内カテゴリー（雇用情報）

実施時期 平成 24 年 5 月 21 日～平成 25 年 3 月 31 日

(2) 情報の内容

情報発信の内容	件数
雇用・就業に関連する説明会の紹介	32
雇用・就業に関連する機関・サイトの紹介	18
公共機関等が発信する人材募集の紹介	9
震災をきっかけとした北海道企業者の紹介	4
その他	2
合計	65

説明会の紹介、機関・サイトの紹介、人材募集の紹介を中心に情報の紹介をした。

5 内職説明会の実施

(1) 実施概要

目的

内職を希望する者に実態を説明する場を作ることを目的として実施した。

対象者

東日本大震災による避難者の方で、内職を考えている方を対象とした。

参加者 14 名

参集方法

北海道 NPO 被災者支援ネット（札幌市）が発行する「生活支援ほっとニュース」に記事を掲載して募集した。

実施日及び内容

ア 実施日 平成 25 年 3 月 13 日

イ 実施内容

株式会社レパネスによる内職説明
質疑応答

実施機関 北海道避難者アシスト協議会
(NPO 法人北海道ふるさと回帰支援センター)

(2) 実施結果

札幌市における内職の実態、説明会社の実態についてや、個人情報の取り扱いについて説明があった。

また、商品の取り扱いの説明があり、実際にあった失敗事例が紹介された。

参加者からは、「家までの距離等個人の事情を考慮した場合、仕事はできるか」、「日曜日は休みか」等の質問があった。



写真 説明を聞く参加者の様子



写真 説明を聞く参加者の様子

ホームページ・フォーラム情報発信モデル事業

1 ブログ型情報発信

(1) 事業の概要

実施の目的

より多くの方々に、道内に避難している方への支援などに関する情報をお知らせするため、インターネットによる情報発信を行った。

実施方法

- ア 掲載内容 同協議会で実施している各事業の募集内容及び実施状況、他団体、自治体よりの情報
- イ 実施時期 平成 24 年 5 月 21 日～平成 25 年 3 月 31 日
- ウ ブログのアドレス <http://blog.canpan.info/hhak/>

実施機関

北海道避難者アシスト協議会（みちのく会）

(2) 実施結果

情報発信の内容について

ホームページへの掲載内容及び件数

分類	件数	主な内容	掲載月(件数)
一時避難支援事業	12	一時避難支援事業の募集、事業の実施状況等	5月(1)、6月(4)、7月(3)、8月(1)、12月(3)
母子避難者の家族再会支援事業	9	母子避難者家族再会支援事業の募集、事業の概要等	8月(2)、9月(3)、10月(1)、11月(1)、1月(1)、2月(1)
一時帰郷支援事業	2	一時帰郷支援の募集	11月(2)
アンケート調査関係	4	避難者等へのアンケート調査の実施状況	8月(2)、9月(2)
雇用情報	65	求人、就職支援サイト、合同面接会等の紹介	8月(1)、12月(15)、1月(22)、2月(17)、3月(10)
フォーラム	4	函館市内、札幌市内で開催したフォーラムの実施状況	11月(1)、12月(1)、3月(2)
他団体からの情報	22	行政、支援団体等からの情報(イベント、住宅支援等)	7月(3)、8月(9)、9月(1)、11月(5)、12月(1)、2月(2)、3月(1)
合計	118		

上表のように、雇用情報（65 件）、一時避難支援事業（12 件）、他団体からの情報（22 件）を中心に適宜情報発信を行った。

一時避難支援事業や母子避難者の家族再会支援事業に関しては、事業の募集概要、実施状況等について掲載した。雇用情報に関しては、実際の求人や就職支援サイトの紹介の他に、避難してから起業して新たな目標をもって生活を始めている方の事例を掲載した。

主な掲載事例

「一時避難支援事業」の事例

2012年5月21日

「東日本大震災・避難者受入支援事業」がスタートしました。

東日本大震災に伴う津波による被害、福島原子力発電所事故等の影響により、夏休み期間などにおける被災地の子供たちなどの本道への一時的な避難について、民間団体などが実施する受入支援の取り組みに対して支援を行います。

支援内容

被災地から北海道への移動に係る交通手段(フェリー、バス)を確保・提供します。

(対象となる期間は平成24年7月から平成25年1月までの取り組みとします)

支援対象となる避難者の地域

東日本大震災に係る災害救助法適用地域(東京都を除く)にお住まいの方を対象とします。

「母子避難者の家族再会支援事業」の事例

2012年8月9日

「東日本大震災・母子避難者の家族再会支援事業」

東日本大震災の影響により、父親は仕事の都合などで被災地に残り、北海道へ母子だけで避難している世帯は、相当数にのぼるものと推測されます。このような世帯は、家族が離れて暮らしているため、経済的な負担が大きいことから、母子と父親の面談する機会も限られているものと考えられます。そのため、少しでもその負担を軽減し、父親が週末などを利用して、日頃離れて暮らす子供たちに会いに来る機会を増やすため、新たに交通費を支援する取り組みを行います。

事業概要

・支援内容: 母子避難者世帯で、被災地に残る父親が一時的に本道に来る場合の航空運賃等の交通費を支援します(上限2万円)。

「アンケート調査関係」の事例

2012年8月17日

「避難者の皆様の実態調査アンケート」を実施しました。

2012年7月に、北海道からの委託を受け、東日本大震災被災避難者の皆様の現状をお聞きして今後の支援活動に活用する目的で、郵送アンケートを実施させていただきました。

全国避難者情報システム「ふるさとネット」の登録世帯を調査対象としており、350世帯よりご回答をいただきました。(重複回答等の精査後の世帯数、2012年8月15日

現在)

ご協力ありがとうございました。

このアンケート結果を踏まえて、一部の避難者様へ聞き取り調査をお願いしたく考えております。何卒ご理解、ご協力をお願い致します。

「雇用情報」の事例

2013年1月18日

北海道若年者就職支援センター ジョブカフェ北海道
ご利用は全て無料！(登録が必要です)

ジョブカフェ北海道は、39歳以下の若年のみなさんを対象とする就職支援施設です。求職中の方、転職を考えている方、学生の方、学校を卒業した方など仕事に関する悩みを持っている方ならどなたでもご利用いただけます。

～ジョブカフェでできること～

・個別就職サポート - 予約制

応募書類添削、面接対策、どんな仕事についたらいいのかなど、職業相談の中で一人一人に合ったサポートが受けられます。

「雇用情報」の事例

2013年1月21日

2度目の冬を乗り越え

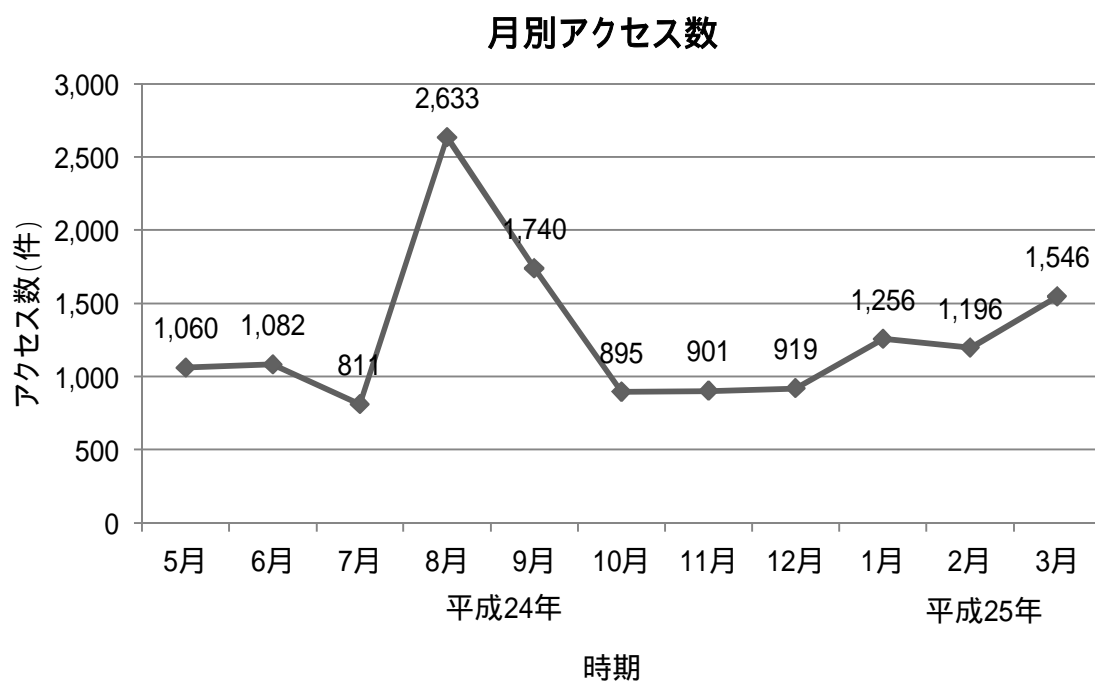
人との繋がりで出来た自然栽培農園とカフェ(安齋 伸也)

安齋氏はこの2年を振り返り、多くの人との繋がりと支援で現在があると言っています。住宅に関しては、1年目は賃貸無料の道営住宅であり、2年目は道の借り上げ住宅がありました。カフェの立ち上げに際しても内閣府から「社会企業家支援」の援助があり、建物は某カフェのオーナーが以前、店として使っていた物件を安く貸してくれ、改装には多くの仲間が手を貸してくれたそうです。



店舗写真

ホームページのアクセス数



ブログへの月別アクセス数は、月当たり約 800 ~ 2,600 件で推移していた。特に 8 月 ~ 9 月のアクセス数が多く、母子避難者の家族再会支援事業の募集概要の掲載を開始したことによるものと思われる。

2 フォーラム型情報発信

(1) 実施目的

東日本大震災が発生した後、現在北海道では岩手県、宮城県、福島県等から約3,000人の方が避難生活を余儀なくされている。

一方、被災地では、復興・再生に向けて全力で取り組んでいるが、まだ長期的な対応が求められている。

このため、被災地の復興の取組みや復興ボランティアの活動状況を紹介し、個々にできる支援について意見交換を行うことを目的に、「東日本大震災 被災地復興・再生支援フォーラム」を開催した。

(2) 開催時期

函館市開催（平成24年12月2日）

札幌市開催（平成25年3月11日）

(3) フォーラム実施概要

函館市開催フォーラム

ア 主 催：北海道避難者アシスト協議会

イ 協 力：北海道社会福祉協議会渡島地区事務所、NPO 法人NPOサポートはこだて、NPO法人大沼・駒ヶ岳ふるさとづくりセンター、みちのく会、北海道協働型福島県避難者支援協議会

ウ 日 時：平成24年12月2日 13:30～15:00

エ 場 所：ホテルリソル函館

オ 参加者：36名

カ 内 容

復興の再生支援の取組み紹介

- ・ 岩手県のコミュニティ支援
(講師 函館市地域交流まちづくりセンター 丸藤 競センター長)
 - ・ 福島県の復興の取組み
(講師 福島県生活環境部避難支援課 青木 加奈子主査)
 - ・ みちのく会(避難者互助組織)の取組み
(講師 みちのく会 本間 紀伊子会長)
 - ・ 北海道内の保養の取組み
(講師 NPO 法人大沼・駒ヶ岳ふるさとづくりセンター 穴澤 剛行氏)
- 質疑応答

キ 実施結果

被災地、また、北海道におけるコミュニティづくり、北海道内での保養の取組み、福島県での復興の取組みについて、各発表者の発表ののち、質疑応答となった。

市民の方から活発な質疑応答がなされるなど、避難生活・被災地での長期的な対応について、関心が高いことがうかがわれるフォーラムであった。

活動団体の資金難などの問題も浮き彫りになり、これからの支援活動について課題が残される形となった。



函館新聞掲載記事
(平成 24 年 12 月 3 日)



北海道新聞掲載記事
(平成 24 年 12 月 3 日)

札幌市開催フォーラム

ア 主 催：北海道避難者アシスト協議会、北海道

イ 協 力：札幌市、福島県北海道事務所、全国広域避難当事者団体ネットワーク

ウ 日 時：平成 25 年 3 月 11 日 13：00～17：30

エ 場 所：札幌コンベンションセンター

オ 参加者：129 名

カ 内 容

基調講演

・「新潟からみた広域避難者の実態調査報告と今後求められる支援の方向性」
(講師 福島県自主避難・母子避難新潟市自治連絡協議会 村上 岳志会長)

・「震災から 2 年目」
(講師 伊達市いちご生産者 丸子 裕人氏)

追悼式

ディスカッション

「広域避難の現実から共に明日の北海道を創る」

コーディネーター：北海道避難者アシスト協議会 湊 源道代表

パネラー：

EN project Japan 曾田 雄志代表

北海道被災者受入支援ネットワーク 野間 克実代表

福島県自主避難・母子避難新潟市自治連絡協議会 村上 岳志会長

小樽商科大学大学院 保田 隆明准教授

みちのく会 本間 紀伊子会長

キ 実施結果

基調講演では、村上講師が、新潟県の避難者の実態について説明され、「福島県では県内への帰還者に支援を始めたが、県外避難者への支援は行っていない。新潟市の避難者の多くは乳幼児を抱えた母子避難で、経済的に厳しく精神的に追い詰められて帰る方が多い。行政や民間での、多様な支援を継続していくことが望ましい」と述べられた。

次に、宮城県より避難した丸子講師が、震災当時から避難するまでのいきさつや避難後のいちごの生産についての取組みを説明し、「支援してくれた感謝の気持ちを伝えるためにも、これからもおいしいいちごを作っていきたい」と述べられた。



写真 村上講師の講演の様子



写真 丸子講師の講演の様子

追悼式では、避難者2名が避難生活を支えてくれる支援者への感謝の言葉を述べた後、午後2時46分に会場の全員で黙祷を行った。

ディスカッションでは、パネラーらによる道内の避難者の現状や今後の避難者への支援をどうやっていくかなどについて討論が行われた。「震災を風化させないためには、“新しいものをつくる”、“情報発信していく”などの方法があるのではないか。就労支援については、避難者の状況とマッチングするように行政と民間が協力してやっていくべきだ」などの意見が挙げられた。

会場の参加者は熱心にメモをとるなどして聞いており、参加した避難者から「(丸子講師の話聞いて)宮城県のいちご生産者の現状は今どうなっているのか」、「子どもを抱えており、フルタイムでは働きづらい。マッチングするような仕事を支援してほしい」という意見があった。



写真 ディスカッションの様子



写真 ディスカッションの様子

ク アンケート結果

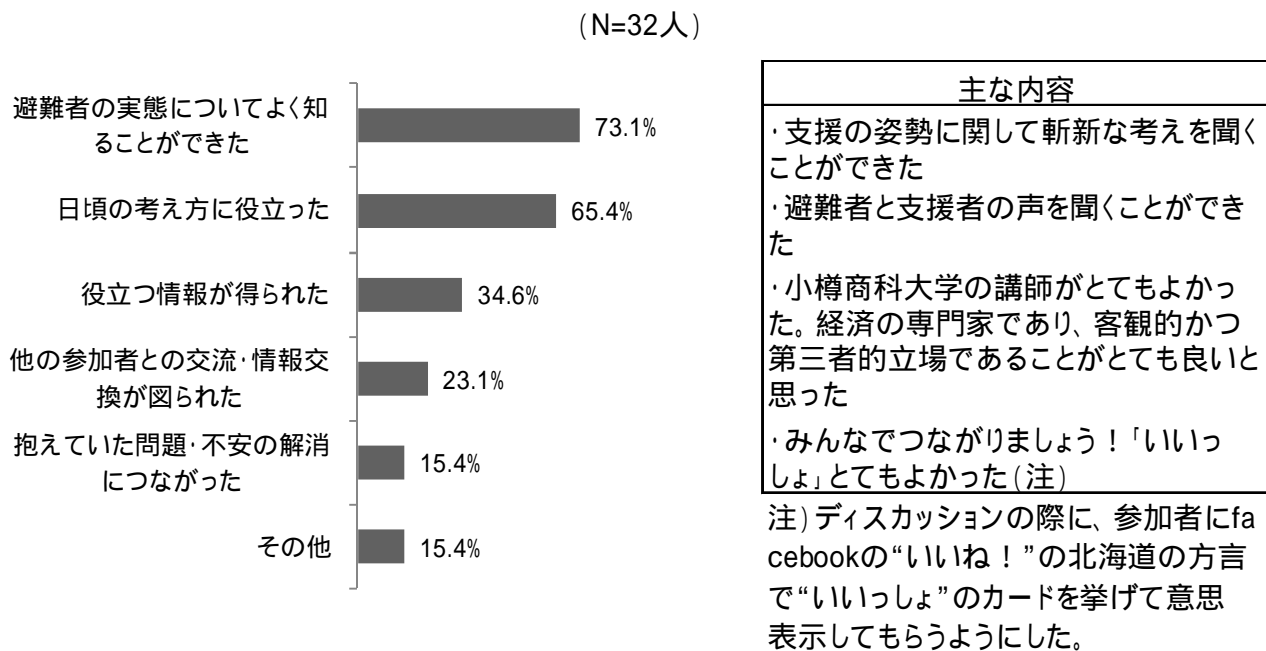
参加者へアンケートを配布し、32名から回答を得た（回収率24.8%）。

フォーラムの内容についての満足度（設問1）



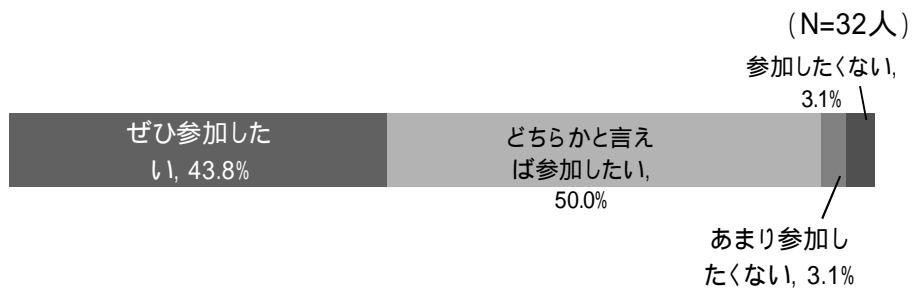
満足度については、「満足」が50.0%、「やや満足」が43.8%と多かった。

フォーラムの良かった点（設問2、複数回答）



フォーラムの良かった点については、「避難者の実態についてよく知ることができた」、「日頃の考え方に役立った」、「役立つ情報が得られた」の順に多かった。その他の内容では、「支援の姿勢に関して斬新な考えを聞くことができた」、「避難者と支援者の声を聞くことができた」などの意見があった。

今後の参加希望（設問3）



今後の参加希望については、「ぜひ参加したい」、「どちらかと言えば参加したい」と回答した人が90%以上であった。

期待する改善点（自由記述）

主な内容
・フォーラムの時間が長かった ・“いいっしょ”はアイデアは良い、結局強制になっており工夫が必要、次回に期待したい

期待する改善点については、「フォーラムの時間が長かった」、「“いいっしょ”は強制にならないような工夫が必要だと思う」という意見があった。